Japanese Association for Tibetan Studies

ツォンカパの『中論』註釈における三時不成の論理

根本　裕史

1　問題の所在

ツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357–1419）の『中論』（*Mūlamadhyamakakārikā*, ナーガールジュナ作）註である *rTsa she Tik chen* は、1407 年から 1408 年頃 *Legs bshad snying po* に続く形で著された彼の代表作の一つである。*rTsa she Tik chen* は、チベットで作成されたその他の『中論』註(1)と比較して極めて浩瀚な註釈書である。また、同書はその随所において先行するチベット人の解釈(2)への批判を含んでいることから、チベット仏教における『中論』受容の歴史を知る上で極めて重要な文献であると言える。

さらにまた、*rTsa she Tik chen* は、『中論』に対する註釈書という性格上、その他のツォンカパの著作において余り力点の置かれていない議論を数多く扱っており、そのことからしても十二分に研究の余地がある作品であると言えるだろう。筆者は目下、時間論という角度からツォンカパの中観思想の一端を明らかにすべく研究を進めているが(3)、彼の時間観に関してこれほどまでに豊富な題材を提供してくれる作品は、同書を措いて他にない。

本稿では主に *rTsa she Tik chen* 第二章に依拠して、三時不成の論理に関するツォンカパの議論について考察することにしたい。言うまでもなく、『中論』第二章の冒頭において提示される三時不成の論理については既に良く知られており、インド学、仏教学の研究者による優れた研究が数多く発表されている(4)。しかしながら、この論理をめぐるチベット仏教での展開については、これまで全く研究されてこなかった(5)。特に *rTsa she Tik chen* 第二章の議論は、ツォンカパ以前のチベット人解釈に対する批判を含んでいると同時に、ツォンカパ自身の時間観を反映したものであるゆえ、注目に値する。

ツォンカパ以前のチベットにおける『中論』の註釈書は多く現存していないが、幸いにして現在目にすることのできるマチャ・チャンチュプツォンドゥー（rMa bya Byang chub brtson 'gros, ?–1185, 以下マチャ・チャンツォンと略記）(6)の *'Thad pa'i rgyan* には、ツォンカパが批判を加えている見解に一致する見解が見出される。そこで、以下では三時不成の論理に関するマチャ・チャンツォンとツォンカパの両者の見解を比較した上で、ツォンカパがマチャ・チャンツォン説を批判していることをまず指摘する。そして、その批判の中に表されているツォンカパの時間観、取り分け「現在」に関する彼の見解を明らかにしたい。

2　議論の背景

最初に、ツォンカパの見解に従って『中論』全体における第二章の位置づけを確認した上で(7)、ここで問題となる『中論』の偈頌を示すことにしよう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ツォンカパに従えば、対象を「勝義として存在する（don dam par yod pa）」もしくは「それ自身の特質に基づいて存在する（rang gi mtshan nyid kyis yod pa）」と捉える無明こそが、輪廻の原因に他ならない。よって、輪廻の苦しみを断ち切るために必要なのは、この無明によって捉えられた対象を否定することである。そして、人（gang zag）を所縁として「我」や「我所」と捉える無明と、法（chos）を所縁として「我」と捉える無明の内、前者の無明の対象を否定することに寄与するのが、『中論』第二章の理論である。ツォンカパは、『中論』の各章をどのような順序で実践するべきかを説明する箇所において次のように述べている。

［1］その中でも、最初に人我や我所として捉える無明の対象を「無である」と確定する必要があるのだが、このことは第十八章によって説示されている。そのようにして人に関して自性を否定した時、「他世（前世）から今世へ来る〔者〕や、今世から他世（来世）へと行く者や、善、不善の業を為す者が存在するゆえに、それは妥当しない」と言う〔反論〕を否定するために、「去来〔の考察〕」（第二章）と「作者の考察」（第八章）の二〔章が説示されているの〕である（*rTsa she Tik chen*, 20b5–21a1）(8)。

よって、ツォンカパによれば第二章の理論は、前世から今世へ、今世から来世へと輪廻することや、その主体を否定するという意義を持つのであり、それはまた、特に人無我の理解を深めるのに有益な理論なのである。さらに、次に示す *rTsa she Tik chen* 第二章末尾の記述は、本章の理論が人だけでなく法にまで拡張され得ることを示している。

［2］まず最初に、現前のものである粗大な去来〔に関して本章の理論を適用した後〕、その次に〔有情が〕前世から今世へ来ることや今世から他世（来世）へ去ることに関しても応用し、無自性の理論を確定するべきである。その次に、法に関連した諸事物についてもまた、〔それらが〕生じる時に何処からも来ないこと、ならびに、滅する時に何処へも去らないことに関して理論を読み替えて応用し、他の全ての所作と能作に関してもその通りに為すべきである（*rTsa she Tik chen*, 67a2–3）(9)。

ここでツォンカパは、第二章の理論を学習する際の手順を三段階に分けている。彼によれば、この章の学習者はまず第一に、粗大な去来（'gro 'ong rags pa）、すなわち、歩行などの場面に見られる去来を取り上げて、それをこの章の理論に従って否定せねばならない。第二には、有情が輪廻世界を去来するという事態に目を向け、そこでの去来を否定せねばならない。そして、第三には、法に関連した事物に着目し、諸存在の生滅の際にも去来が成立しないことを確定せねばならない。このようにしてツォンカパは、歩行などの場面における去来の否定を出発点としながらも、最終的にはあらゆる人法の去来に関してその理論を応用して、ありとあらゆる去来が無自性であることを確定することにこそ、『中論』第二章の議論の意義を見出しているのである(10)。

では、具体的には如何にして去来の自性が否定されるのだろうか。それは、*rTsa she Tik chen* 第二章の科文に着目すれば明らかなように、行為（bya ba）、行為主体（byed pa po）、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

行為対象（las）という三つの作業概念を軸にして行われる。同章の科文を抜粋してその和訳を示せば、以下の通りである（括弧内は、註釈の対象となる偈頌の番号を表す）(11)。

K1 行為対象と行為主体における行為を個別的に否定する
　L1 行為対象について吟味した上で否定する
　　M1 三つの道に関して共通に行為を否定する（k.1）
　　M2〈現に去られつつある所〉に関して行為を個別に否定する
　　N1 前主張を提示する（k.2）
　　N2 それを否定する理論
　　O1 目的語と動詞の一方が意味を有するならば他方は意味を欠いている（k.3）
　　O2 両者が意味を伴うならば過大適用となってしまう（k.4–6）
　L2 行為主体について吟味した上で否定する（k.7–11）
　L3 行為が存在することの根拠を否定する（k.12–17）
　L4 行為について吟味した上で否定する（k.18–23）
K2 行為対象と行為主体における行為を共通に否定する（k.24–25ab）

この科文の構成が示すように、冒頭付近では、行為対象である「道」を過去、未来、現在の三通りに場合分けした上で、その何れにおいても〈去る行為〉は妥当しないことが論じられる。所謂「三時不成」の論理である。ここでは、この論理を最も鮮烈に表現した第一偈に着目したい。この偈頌を、チベット語訳や諸註釈に基づいて次のように訳すことが出来る。

まず、〈既に去られた所〉は去られない。
〈未だ去られていない所〉も去られない。
〈既に去られた所〉と〈未だ去られていない所〉以外に
〈現に去られつつある所〉は知られない（MMK II 1）(12)。

ここでナーガールジュナは、まず前半の二句で、過去の道（既に去られた所）と未来の道（未だ去られていない所）において去ることを否定し、次に後半の二句で、現在の道（現に去られつつある所）において去ることを否定している。現在の〈去る行為〉が、過去や未来の道と両立しないことは自明であるから、前半の二句については議論の余地はないだろう。むしろ、問題とすべきは、現在の道に関して述べられた後半の二句である。また、マチャ・チャンツォンとツォンカパとの間で見解の不一致が起きているのも、そこにおいてである。よって、以下では後半の二句の解釈に注意しながら、両者の見解を比較することにする。

3　マチャ・チャンツォンの見解

まずマチャ・チャンツォンの見解から先に見てみよう。彼は『中論』第二章、第一偈を次のように註釈している。

［3］その内、まず〈既に去られた道〉は去られない。なぜなら、〈去る行為〉が既に滅

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

して無くなっているからである。〈未だ去られていない道〉もまた、去られない。なぜなら、〈去る行為〉が未だ生じておらず、存在していないからである。〈現に行かれつつある所〉、すなわち、〈現に去られつつある道〉においてもまた、去ることはない。なぜなら、道という場所において或る〈去る者〉によって通過された〔所〕と、未だ通過されていない〔所の二者〕は直接対立するので（dngos 'gal yin pas）、〈既に去られた所〉と〈未だ去られていない所〉以外に〈現に去られつつある所〉は知られず、認識されないゆえ、その二者以外の〈現に去られつつある所〉は存在しないからである（*'Thad pa'i rgyan*, 39b6–40a2）(13)。

下線部が示すように、マチャ・チャンツォンは「過去の道」と「未来の道」の両者が直接対立することを主張している。一般に或る二つの物が直接対立することとは、その二つを除いた第三の集合（phung gsum）があり得ないことを含意するから(14)、過去と未来の道が直接対立するということは、「現在の道」という第三の集合が無（med pa）であることを帰結する。よって、彼の解釈に従えば、「現在の道」は無であり、無である「現在の道」において〈去る行為〉は存在し得ないのだというのが、ナーガールジュナの意図であると理解することが出来る(15)。

4　ツォンカパの見解とその意義

しかしながら、このようなマチャ・チャンツォンの解釈は、ツォンカパには決して受け入れられない考え方であった。まず、ツォンカパがマチャ・チャンツォンの見解から決別していることを端的に示す文章から見てみよう。ツォンカパは、この偈頌に説かれる三時不成の論理の意味を次のようにまとめている。

［4］従って、この理論は、足によって踏まれたその道が、「全体」たる足を基準に第三の集合として本性によって存在することを否定するのであって、〈既に去られた所〉と〈未だ去られていない所〉が直接対立することに基づいて（dngos 'gal yin pas）第三の集合を否定するものではない(16)。なぜなら、まさに註釈(17)では、〈去る行為〉が既に滅した所を〈既に去られた所〉、未だ生じていない所を〈未だ去られていない所〉、現在の〈去る行為〉によって伴われた所（'gro ba'i bya ba da ltar bas zin pa）を〈現に去られつつある所〉と説明しているからである（*rTsa she Tik chen*, 56a2–3）(18)。

引用文［3］と［4］の下線部分を比較すれば分かるように、ツォンカパは「現在」の否定に関して、マチャ・チャンツォンに見られるような解釈に明らかに異を唱えている。ツォンカパによれば、ナーガールジュナは過去と未来が直接対立することを根拠にして、現在の存在を否定しているのではない。なぜなら、過去や未来の道が存在するのと同様に、現在の〈去る行為〉によって伴われた道も存在しているからであり、現在の道が存在するということはまた、「註釈」の作者であるチャンドラキールティの見解でもあるからである。従って、この偈頌においては、過去の道と未来の道が直接対立することを根拠にして、第三の集合た

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

る現在の道が否定されているのではない。現在の道は端的に存在しないのではなく、あくまで本性によって（ngo bos）存在しないのであり、この偈頌の後半部は「本性によって存在する現在の道は、去られない」という意味で理解されねばならないのである(19)。

では、なぜ現在の道は「本性によって存在しない」と言えるのか。それは、「現在の道」として把握されている物が、果たして把握された通りに存在しているのか否かを探し求めて考察したときに、そのような物は何ら見出されないからである。これに関して、ツォンカパはチャンドラキールティの『明句論（*Prasannapadā*）』(20)に依拠して次のように説明している。通常、現に歩行している人の足によって踏まれている場所が〈現に去られつつある所〉であり、「現在の道」であると見なされる。ところが、実際にはそのような場所は、考察しても見出されないのである。

まず第一に、歩行者の「足の指」と「踵」の二箇所に着目すると、以下のような理屈で第三の集合たる「現在の道」は存在しないと言える。

［5］さらに、足によって踏まれている道で、(a) 足の指によって踏まれている所の後ろは、その部分の〈去る行為〉が滅した所であり、(b) 踵によって踏まれている所の前は、その部分の〈去る行為〉が未だ生じていない所である。よって、(a)(b) その両者を基準にすれば、間の道は「行為が滅した所」と「行為が未だ生じていない所」の何れでもない第三の集合として存在しない（*rTsa she Tik chen*, 55a6–b1）(21)。

ここで「足の指」（=a）は足の先頭部分のことを意味し、「踵」（=b）は足の末尾の部分のことを意味する。その内、足の指によって踏まれている所を基準にすれば、その後方は「過去の道」である。また、踵によって踏まれている所を基準にすれば、その前方は「未来の道」である。ゆえに、この二つの地点を基準に「現在の道」という第三の集合を探し求めても、それは見出されない。それでは、今のように足を諸部分に分解せずに、足全体（=c）を基準にすることによって「現在の道」という第三の集合を見出すことは可能だろうか。ツォンカパは、次のように解答を与えている。

［6］(c) その二部分の何れでもない足で、それ自身の特質によって成立した何らかの物が存在する場合には、その間の道は、(a)(b)「部分」を基準にして、両者何れでもないものとして存在することはないとしても、(c)「全体」たる足を基準にして、両者何れでもないものとして存在する〔ことになるだろう〕。けれども、(c) その二部分の何れでもない足にして、本性によって成立したものは存在しないのだから、(c) それを基準にして、その〔間の〕道が〈現に去られつつある所〉として本性によって存在することはないのである（*rTsa she Tik chen*, 55b1–2）(22)。

もし指や踵などといった諸部分とは別個に、それ自身の特質によって成立した「足全体」が存在するならば、それを基準にして第三の集合たる「現在の道」を立てることが可能である。しかしながら、諸部分に依存しない「足全体」なるものは実際に存在しないので、それを基準にして立てられるべき「現在の道」もまた、それ自身の特質によって（もしくは、本

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

性によって）存在することはないのである。

このようにして、「現在の道」という第三の集合を探し求めて考察しても、通常それとして把握されている通りに見出されることはない。そのことから、現在の道は「本性によって存在しない」と結論される。また、以上のことは現在の道が無（med pa）であることを帰結するものではない。ツォンカパの表現を用いれば、現在の道は「全体たる足を基準にして第三の集合として本性によって（cha can rkang pa la ltos nas phung gsum du ngo bos）」存在しないのであって、ただ単に存在しないのではない。そして、このような限定詞が付けられている限りにおいて、現在の道の存在は否定されるのである。

では、なぜツォンカパは現在の否定に関して、このように回りくどい説明を与えているのだろうか。彼が、マチャ・チャンツォンの言うような「現在は存在しない」という理解で満足出来なかった理由は何であろうか。それは次に示すように、現在の存在を認めることが、過去と未来を設定する上で不可欠だからである。

［7］【反論】さらにまた、〈現に去られつつある道〉が存在しないならば、現在の道は存在しない〔ことになる〕。しかし、その通りだとすれば、行為が滅した過去の道と、〔行為が〕未だ生じていない未来の道もまた、存在しないことになってしまうだろう。【答】〈既に去られた所〉と〈未だ去られていない所〉は、『明句論』(23)で「行為が滅した所」と「行為が未だ生じていない所」を指すものとして説明されている。その両者何れでもない〈現に去られつつある道〉が存在しないならば、ちょうど指摘された通りの過失となるであろうけれども、ここではその両者何れでもない〈現に去られつつある道〉が存在しないと論じているのではないのであって、〈現に去られつつある道〉にして〈本性によって存在する物〉を否定した上で、それにおける〈去る行為〉を否定するのである（*rTsa she Tik chen*, 55a3–6）(24)。

rTsa she Tik chen 第十九章にも述べられているように(25)、過去と未来は現在に依存しているため、もし現在が存在しなければ、過去と未来を設定することは不可能になる。よって、現在の道が存在しないならば、過去と未来の道も存在しないことになり、三つの時間に属する道の何れもが成り立たなくなってしまう。しかし、チャンドラキールティが過去の道（行為が既に滅した所、既に去られた所）と未来の道（行為が未だ生じていない所、未だ去られていない所）について説明を与えているように、中観説においても言説としての過去と未来は認められている。ゆえに、それらを認めるために必要な現在の道もまた、存在すると認められねばならない。このようにしてツォンカパは、自らの解釈こそがチャンドラキールティの見解なのであるという自負をもって、現在の有を主張している。

現在が言説有（tha snyad du yod pa）であるというツォンカパの見解は、*rTsa she Tik chen* 第七章の記述からも確認される。以下に示す引用文［8］は、『中論』第七章、第十四偈(26)に対する註釈の一部である。この偈頌でナーガールジュナは三時不成の論理を用いて、生相によって物が生み出されることを否定している。すなわち、生み出されるもの（bskyed bya）は過去、未来、現在の何れかに属する筈であるが、その何れもが生み出されることはな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

い。なぜなら、過去の〈既に生じたもの〉と未来の〈未だ生じていないもの〉は現在の〈生の作用〉と両立せず、また、〈既に生じたもの〉と〈未だ生じていないもの〉以外に〈現に生じつつあるもの〉は認められないからである。ツォンカパは、ここで〈現に生じつつあるもの〉が否定されることの意味を次のように解説している。

［8］このことは、先程〈現に去られつつある所〉に関して解説したように、一般に〈既に生じたもの〉と〈未だ生じていないもの〉が直接対立するものであるとしても、それを根拠に否定しているのではない。なぜなら、〔それが根拠であるとしたら〕二者択一的に言われている〈既に生じたもの〉と〈未だ生じていないもの〉と、今の場合の〈既に生じたもの〉と〈未だ生じていないもの〉は意味が同じである筈だが、今の場合の両者は註釈(27)で、「生じた後に滅したもの」および「未来のもの」を指すものとして説明されているからである。従って、「生じた後に滅したもの」と「生の作用を未だ開始していないもの」の両者何れでもない「現在の生」は言説において存在するので（tha snyad du yod pas）、先後の二時以外の〈現に生じつつあるもの〉は「それ自身の本性によって存在しない」という意味なのである（*rTsa she Tik chen*, 101a1–3）(28)。

ここでツォンカパの展開している議論が、*rTsa she Tik chen* 第二章に見られたものと軌を一にすることは明らかである。彼によれば、既に生じた過去のものと未だ生じていない未来のものが直接対立することを根拠に、〈現に生じつつあるもの〉という第三の集合の無を導くことがナーガールジュナの意図なのではない。チャンドラキールティの註釈が示すように、ここで用いられている論法は〈既に生じたもの〉と〈未だ生じていないもの〉の二者からなるディレンマではなく、その二つに現在の生（skye ba da ltar ba）たる〈現に生じつつあるもの〉を加えた三者からなるトリレンマである。よって、〈現に生じつつあるもの〉は言説において存在する。また、それは端的に存在しないのではなく、あくまで「それ自身の本性によって存在しない（rang gi ngo bo nyid kyis med pa）」と言わねばならない。

かくして、ツォンカパの理解する三時不成の論理の下では、言説有としての現在が認められている。さらにまた、過去と未来は現在を基準にして設定されるべきものであり、現在なしには有り得ないものであることからして、彼の解釈においては三時の全てが設定可能となるのである。

以上の考察を通じて明らかになったことをまとめれば、次の通りである。

1. マチャ・チャンツォンの理解する三時不成の論理の下では、過去と未来が直接対立することを根拠にして、現在の存在が否定される。
2. ツォンカパはそのようなマチャ・チャンツォンの解釈に異を唱え、現在は「存在しない」のではなくて「本性によって存在しない」のであると理解した。
3. ツォンカパは、自らの解釈こそがチャンドラキールティの見解なのであるという自負の下、言説有としての現在を認め、そのことによって三時の全てを正しく設定可能にした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

略号表

Deb ther sngon po 'Gos lo tsa'a ba gzhon nu dpal. *Deb ther sngon po.* Varanasi: Vajra Vidya Library, 2003.

dGongs pa rab gsal Tsong kha pa blo bzang grags pa. *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dGongs pa rab gsal.* Tohoku No.5408. Zhol ed. (ma).

MHTL *Materials for a History of Tibetan Literature.* (Śata-piṭaka series). Ed. L. Chandra. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1963.

MMK(Skt.) Nāgārjuna. *Mūlamadhyamakakārikā.* In *Nāgārjuna: Mūlamadhyamakakārikāḥ.* Ed. J.W. de Jong. Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1977.

MMK(Tib.) Nāgārjuna. *Mūlamadhyamakakārikā.* Tohoku No.3824. sDe dge ed.

Pras Candrakīrti. *Prasannapadā.* In *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti.* Ed. Louis de la Vallée Poussin. (Bibliotheca Buddhica IV). St. Petersburg, Reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.

rTsa she Tik chen Tsong kha pa blo bzang grags pa. *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad Rigs pa'i rgya mtsho.* Tohoku No.5401. Zhol ed. (ba).

'Thad pa'i rgyan rMa bya Byang chub brtson 'gros. *dBu ma rtsa ba shes rab kyi 'grel pa 'thad pa'i rgyan.* Sikkim: Dharma Chakra Center, 1975.

'Thad pa'i snang ba Red mda' ba gzhon nu blo gros. *dBu ma rtsa ba'i 'grel pa 'thad pa'i snang ba.* In *The Collected Works of Red-mda wa gzhon-nu blo-gros.* (kha). Rajpur: Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang, 1999.

文献表

Cardona, G.

1991 "A Path Still Taken: Some Early Indian Arguments Concerning Time." *Journal of the American Oriental Society.* 111–3. pp.445–464. 1991.

Hopkins, J.

1974 *Chapter Two of OCEAN OF REASONING by Tsong-ka-pa: A commentary on Nāgārjuna's Fundamental Treatise on the Middle Way, Proving the Emptiness of Going and Coming.* Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.

Katsura, S.

2000 "Nāgārjuna and the Trilemma or *traikālyāsiddhi.*" *On the Understanding of Other Cultures: Prooceedings of the International Conference on Sanskrit and Related Studies to Commemorate the Centenary of the Birth of Stanislaw Schayer (1899–1941).* Warsaw: Warsaw University, pp.207–231.

Kellner, B.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

1997 "Types of Incompatibility (*'gal ba*) and Types of Non-Cognition (*ma/mi dmigs*) in Early Tibetan *Tshad ma* Literature." *Tibetan Studies, Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995.* Volume I, Wien: Brill, pp.495–510.

Onoda, S.

1992 "Phya pa Chos kyi seng ge's Theory of *'gal ba*," *Tibetan Studies, Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989.* Volume I, Tokyo: Brill, pp.197–202.

小川英世

1991 「*Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata* ——『中論』II, kk. 1-6 の一考察——」『印度学仏教学研究』39–2、pp.168–172。

立川武蔵

1994 『中論の思想』、法蔵館。

東洋文庫チベット研究室

1996 『西蔵仏教基本文献　第1巻 *The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum (1)*』、東洋文庫。

長尾雅人

1978 「中論の構造——宗喀巴『中論釈』を中心として——」『中観と唯識』、岩波書店、pp.321–332。

注

(1) そもそもチベット人の手による『中論』の註釈書は、『入中論』に対する註釈書などに比べて意外な程に数が少ない。例えば、MHTL の「中観関連 (dbu ma'i skor)」のリストに挙げられている作品の内、『中論』の註釈書と確認されるのは九作品のみである (MHTL No.11315, 11322, 11349, 11390, 11399, 11441, 11444, 11455, 11459)。

(2) ツォンカパ以前に著作されたチベット撰述の『中論』註の中で、存在していたことが知られる最古のものはゴク・ロツァーワ (rNgog lo tsa ba, 1059–1109) による *rTsa she'i Tikka* (MHTL No.11315) であるが、この作品は残念がら現存していない。それに次いで古いのが、本稿で取り上げるマチャ・チャンツォンの *'Thad pa'i rgyan* (MHTL No.11322) である。さらにまた、ツォンカパの重要な師であったレンダーワ・ションヌロドゥー (Red mda' ba gzhon nu blo gros, 1349–1412) の *'Thad pa'i snang ba* (MHTL No.11349) も現存しており、参照可能である。ツォンカパが *rTsa she Tik chen* の随所において取り上げている、彼以前のチベット人による解釈が一体誰に帰せられ得るかに関しては、それぞれの箇所について逐一検討を要するが、それは今後の課題である。

(3) その成果の一部は、拙稿「ツォンカパの中観思想における業果設定の根拠」(『南都佛教』84、2004 年)、「チベット中観思想における〈滅したもの〉をめぐる論争」(『哲学』56、2004 年)、および "Tsong-kha-pa's Interpretation of Three Times" (『印度学仏教学研究』53–1、2004

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

年）において公表されている。

(4) Cardona (1991)、小川 (1991)、立川 (1994)、Katsura (2000) など。

(5) *rTsa she Tik chen* 第二章の英訳が Hopkins (1974) によって既に行われているが、同研究は内容の分析に全く立ち入っていないものである。

(6) *Deb ther sngon po* によれば、マチャ・チャンツォンはチャパ・チューキセンゲ（Phya pa chos kyi seng ge, 1109–1169）の弟子の一人であったが、ク・ロツァーワ・ドデーバル（Khu lo tsa'a ba mdo sde 'bar）とジャヤーナンダ（Jayānanda）にも師事し、実際にはチャパの説よりもジャヤーナンダ等の説を重視していた（*Deb ther sngon po*, 406.16–407.2）。マチャ・チャンツォンは『中論』註である *'Thad pa'i rgyan* の他に、*Tshig gsal stong thun gyi 'grel pa*、*dBu ma'i bsdus pa*、*dBu ma'i stong thun*、ジャヤーナンダの『思択槌（*rTog ge tho ba*）』に対する註釈、『入中論註』の「略義（bsdus don）」と「割註（mchan bu）」など、多くの中観の著作を残しているが（*Deb ther sngon po*, 417.10–12）、現時点で目にすることが出来るのは *'Thad pa'i rgyan* のみである。

(7) ツォンカパの *rTsa she Tik chen* に依拠した『中論』の構造の分析が、既に長尾 (1978) によって行われている。なお、ツォンカパに先立って、既にマチャ・チャンツォンが『中論』の各章の関係を説明しているが（*'Thad pa'i rgyan*, 17b5–19a5）、マチャ・チャンツォンによる説明はツォンカパによるものとは若干異なっている。彼は第一章と第二章を、「縁起」の限定的性質の内の主要なもの（gtso bo）を説く章と位置づけているのみであり、ツォンカパのように第二章の議論を二無我の見解と関連づけて説明してはいない。

(8) *rTsa she Tik chen*, 20b5–21a1: de la yang thog mar gang zag gi bdag dang bdag gi bar 'dzin pa'i ma rig pa'i yul med par gtan la dbab dgos la de yang rab byed bco brgyad pas ston no // de ltar gang zag la rang bzhin bkag pa na 'jig rten pha rol nas 'dir 'ong ba dang 'di nas pha rol du 'gro ba po dang las dge mi dge byed pa po yod pas de mi 'thad do snyam pa 'gog pa la 'gro 'ong dang byed pa po brtag pa gnyis so //

(9) *rTsa she Tik chen*, 67a2–3: dang po mngon du gyur pa'i 'gro 'ong rags pa dang de nas 'jig rten snga ma nas 'dir 'ong ba dang 'di nas pha rol tu 'gro ba rnams la yang sbyar nas rang bzhin med tshul nges par bya / de nas chos kyi dbang du byas pa'i dngos po rnams la yang skye ba'i tshe gang nas kyang mi 'ong ba dang / 'gag pa'i tshe gang du yang mi 'gro ba la rigs pa 'don pa spos nas sbyar zhing bya byed gzhan thams cad la yang de ltar bya'o //

(10) ツォンカパによれば『中論』第二章の理論は、去来が端的に無（med pa）であることを帰結するものではなく、〈本性に基づいて存在する去来〉（'gro 'ong ngo bo nyid kyis yod pa）を否定するものである。つまり、〈去る者〉、〈去られる所〉、〈去る行為〉といった現象は、単に言説に基づいて設定されただけのものとして存在しているけれども、「果たしてそれらは把握された通りに存在しているのか、存在していないのか」と探究するならば、言説の根拠付けを担う基盤は何ら見出されない。このことを理解せしめるのが、この章の目的なのである（*rTsa she Tik chen*, 66b2–6 を参照）。

(11) 科文の見出しは、東洋文庫 (1996, 46–47) に従った。

(12) MMK(Skt.) II 1: gataṃ na gamyate tāvad agataṃ naiva gamyate / gatāgatavinirmuktaṃ gamyamānaṃ na gamyate // MMK(Tib.) II 1: re zhig song la mi 'gro ste // ma song ba la'ang 'gro ba min // song dang ma song ma gtogs par // bgom pa shes par mi 'gyur ro //

サンスクリット原文に従えば、d 句の 'gamyate' を、a 句や b 句の場合と同様に「去られ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ない」の意味で理解することも出来るが、チベット語訳（上記を参照）、『ブッダパーリタ註』(sDe dge ed., 168b5–6)、『般若灯論』(sDe dge ed., 64a7)、『明句論』(Pras 93.8) は何れも「知られない」という意味を支持している。ツォンカパの註釈も同様である。

(13) *'Thad pa'i rgyan*, 39b6–40a2: de la re zhig song ba'i lam la ni mi 'gro ste 'gro ba'i bya ba 'gags nas med pa'i phyir ro // ma song ba'i lam la'ang 'gro ba min te 'gro ba'i bya ba ma skyes nas med pa'i phyir ro // 'gro bzhin ba bgom pa'i lam la'ang 'gro ba med de / yul lam la 'gro ba po gcig gis brgal ma brgal dngos 'gal yin pas song dang ma song las ma gtogs pa'i bgom pa shes pa'am dmigs par mi 'gyur bas de gnyis las ma gtogs pa'i bgom pa nyid med pa'i phyir ro //

(14) 〈直接対立〉(dngos 'gal) の概念が第三の集合の排除を含意するものであることは、例えばマチャ・チャンツォンによる次の記述から確認される。「生起一般には、原因に依存するか依存しないかという二つ〔の可能性がある。その内、生起が原因に〕依存する場合、原因一般に関して〔それが〕結果とは実体が異なることと、異ならないことの二者は直接対立するので第三の集合は有り得ず（*'Thad pa'i rgyan*, 24b3: skye ba tsam la rgyu la ltos mi ltos gnyis dang / ltos pa la rgyu tsam la 'bras bu dang rdzas tha dad mi dad gnyis dngos 'gal yin pas phung po gsum pa mi srid cing /)、…」

なお、Onoda (1992) や Kellner (1997) が詳細に検討しているように、初期のチベット論理学では〈対立〉('gal ba) の概念に関して諸見解が存在していたことが知られている。そのため、マチャ・チャンツォンが言及する〈直接対立〉の概念にも注意が必要であるが、ここではそれが第三の集合の排除を含意することさえ押さえておけば十分であると思われる。

(15) ツォンカパの師であったレンダーワもまた、マチャ・チャンツォンと同様の理解をしていた可能性がある。「〈現に去られつつある道〉においてもまた、去ることはない。なぜなら、〈既に去られた所〉と〈未だ去られていない所〉以外に、〈現に去られつつある所〉は知られないからである。これは、〈去る者〉によって既に通過された場所が〈既に去られた所〉であり、未だ通過されていない所が〈未だ去られていない所〉なのであるが、その場合、この二者とは異なる別の道の様態は存在しないからである（*'Thad pa'i snang ba*, 20b2–4: 'gom bzhin pa'i lam la yang 'gro ba med de / song dang ma song ma gtogs par 'gom pa shes par mi 'gyur ba'i phyir te / 'di ni 'gro ba pos brgal zin pa'i yul ni song ba yin la / brgal ma zin pa'i yul ni ma song ba yin na / de gnyis las tha dad pa'i lam gyi rnam pa gzhan med pa'i phyir ro //)」

しかし、レンダーワは過去と未来の道が直接対立するものであることを明言するには至っておらず、彼の註釈の意図は必ずしも明確でない。

(16) ツォンカパは *dGongs pa rab gsal* において〈直接対立〉を次のように規定している。「或る基体が虚偽にして欺く対象であると決定される場合、〔その基体が〕欺かない真実のものであることは必ず除外される。ゆえに、『欺くこと』と『欺かないこと』は〈相互的に排除して存在する直接対立〉である。それであれば全ての所知を遍充するので、二者の何れでもない第三の集合を排除するのである（*dGongs pa rab gsal*, 98b2–4: gzhi gang zhig brdzun pa slu ba'i don du yongs su bcad na / mi slu ba'i de kho na nyid yin pa rnam par gcad dgos pas / slu mi slu ni phan tshun spangs te gnas pa'i dngos 'gal lo // de yin na ni shes bya thams cad la khyab par byed pas gnyis dang gnyis ma yin gyi phung gsum sel ba yin te)」

(17) Pras 9 2.9 および Pras 93.1 の箇所を指す。

(18) *rTsa she Tik chen*, 56a2–3: des na rigs pa des rkang pas mnan pa'i lam de cha can rkang pa la ltos nas phung gsum du ngo bos yod pa 'gog gi / song ma song dngos 'gal yin pas phung gsum 'gog pa min te / 'grel pa nyid las 'gro ba'i bya ba 'gags pa dang ma skyes pa

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

gnyis song ma song dang 'gro ba'i bya ba da ltar bas zin pa bgom par bshad pa'i phyir ro //

(19) 引用文［7］においても述べられるように、ツォンカパによれば第一偈の後半部は、本性によって存在する〈現に去られつつある道〉を否定した上で、それにおける〈去る行為〉を否定しているのである。

(20) Pras 93.9–14 を参照。

(21) *rTsa she Tik chen*, 55a6–b1: de yang rkang pas non pa'i lam rkang pa'i sor mos non pa'i rgyab ni cha de yi 'gro ba zhig pa dang / rting pas non pa'i mdun gyi cha de yi 'gro ba'i bya ba ma skyes pa yin pas de gnyis la ltos nas ni bar gyi lam de bya ba zhig pa dang ma skyes pa gang yang min pa'i phung gsum du med do //

(22) *rTsa she Tik chen*, 55b1–2: cha de gnyis gang yang min pa'i rkang pa rang gi mtshan nyid kyis grub pa zhig yod na / cha la ltos nas bar gyi lam de gnyis ma yin du med kyang cha can rkang pa la ltos te gnyis ma yin gyi phung gsum du yod na'ang / cha de gnyis gang yang min pa'i rkang pa ngo bo nyid kyis grub pa med pas de la ltos nas lam bgom bzhin par ngo bo nyid kyis yod pa min no //

(23) 注 (17) を参照。

(24) *rTsa she Tik chen*, 55a3–6: gzhan yang bgom bzhin pa'i lam med na ni lam da ltar ba med la de lta na bya ba zhig pa'i 'das pa dang ma skyes pa'i ma 'ongs pa'i lam yang med par 'gyur ro zhe na / song ma song ni tshig gsal las bya ba zhig pa dang ma skyes pa la bshad la de gnyis gang yang min pa'i bgom pa'i lam med na ni ji skad bshad pa'i skyon du 'gyur yang / 'dir de gnyis gang yang min pa'i bgom pa'i lam med par mi smra yi bgom pa'i lam ngo bo nyid kyis yod pa bkag nas de la 'gro ba'i bya ba 'gog go //

(25) *rTsa she Tik chen* 第十九章には「…現在から過ぎ去っていることによって過去〔と設定し〕、そこに未だ来ていないことによって未来と設定せねばならないが、現在が無ければその〔ように過去と未来を設定する〕ことは不可能だからである（*rTsa she Tik chen*, 195a6: da ltar ba las 'das pas 'das pa dang der ma 'ongs pas ma 'ongs par 'jog dgos na da ltar ba med na de mi rung ba'i phyir ro //)」と述べられている。

(26) MMK(Skt.) VII 14: notpadyamānaṃ notpannaṃ nānutpannaṃ kathaṃ cana / utpadyate tad ākhyātaṃ gamyamānagatāgataiḥ // MMK(Tib.) VII 14: skyes dang ma skyes skye bzhin pa // ji lta bur yang mi skyed pa // de ni song dang ma song dang // bgom pas rnam par bshad pa yin //

(27) Pras 158.2–8 の箇所を指す。

(28) *rTsa she Tik chen*, 101a1–3: 'di ni sngar bgom pa la bshad pa ltar spyir skyes ma skyes dngos 'gal yin yang de rgyu mtshan du byas nas 'gog pa min te brtag pa gnyis byas pa'i skyes ma skyes dang / 'di'i skyes ma skyes gnyis don gcig dgos la de gnyis ni 'grel par skyes nas 'gags pa dang ma 'ongs pa la bshad pa'i phyir ro // des na skyes nas 'gags pa dang skye ba'i bya ba ma brtsams pa gnyis gang yang min pa'i skye ba da ltar ba tha snyad du yod pas dus snga phyi gnyis las ma gtogs pa'i skye bzhin pa rang gi ngo bo nyid kyis med pa'i don no //

NII-Electronic Library Service